

豊田市の
歴史

豊田市のルーツは約 1 万 6 千年前にあった

● “むら”の誕生 豊田地方の黎明期 —先土器時代～奈良時代—

豊田市のルーツをたどっていくと、今からおよそ 1 万 6 千年前の先土器時代、そしてそれに続く縄文時代へと行き当たる。狩猟や採集に明け暮れた当時の人々の生活は、市内各所の丘陵、松平地区の酒呑、野見山しやちのみろく、猿投神郷下などにある遺跡から出土する石器・土器の分布状況からもうかがい知ることができる。

彼らは、狩猟採集を基調にした「むら」を社会の構成単位としてきた。しかし、西方から米づくりが伝わり、生活の様式が変化していく中で、大きな社会の転換期を迎えることになった。つまり、食糧生産経済を基調にした「むら」社会への転換だ。このような「むら」の跡は、高橋や梅坪、保見、鴛鴨など市内各所で発見されているが、昭和 46 年に手呂団地の造成工事中に見つかった銅鐸も、こうした「むら」をとりまとめる“祭り”の道具ではなかったかと思われる。

弥生文化のもたらした新しい生活は、一方で特定の「むら」への富の集中を引き起こすことになった。ここからいわゆる「小国家」が誕生し、分離、統合を繰り返しながら、やがて「国家」が形成されていった。現在も矢作川沿岸には数百の古墳が残っているが、これらは当時大和朝廷の支配下に組み込まれていった有力者たちの身分を表すものと言える。

豊田市域が、古墳時代の最盛期を迎えたころ、大和朝廷では「クニ」の結束を強化するため、仏教の輸入を積極的に進めていった。仏教文化の影響はやがて豊田市域にも伝播し、国指定の史跡「舞木廃寺塔址」などにもその影響を見ることができる。

● 戦国の世と城下町 「衣」から「挙母」へ —平安時代～江戸時代—

平安時代を迎えるころには、豊田地方にも朝廷の支配のもとで 10 ほどの「郷(ごう)」が形成されていった。現在の保見、高橋、挙母(衣)、畝部、若林などはそうした「郷」の一部だった。また、かつての村落集団の田券(地券)などに押された古印と思われる「伊保郷印」(市指定文化財)も、平安時代の数少ない資料だ。

平安時代も後期に入ると、国による土地の統制が崩れ始め、地方に「荘園」と呼ばれる私有地が増加した。「荘園」の出現は朝廷の権威を弱めることになり、地方へ下って勢力を持った国司・郡司たちによる新興の武家勢力の台頭を招くことになった。これが鎌倉幕府成立へとつながっていった。

1192年に成立した鎌倉幕府は、とくに西三河地方に重臣を送って支配の強化に努めた。金谷町にある金谷城は、中条氏代々の居館跡で、空堀の跡をはじめとする数々の遺溝に当時の様子をしのぶことができる。今日見られる古くからの集落がほとんどできあがったのもこのころのことだ。

源氏の治世が終わりを告げ、戦国時代を迎えると、中条氏の勢力は衰え始め、この地方では松平氏(後の徳川氏)、鈴木氏、三宅氏などの「土豪」が互いに勢力を競い合うようになった。豊田の地は今川、織田、松平の3者の接点ということもあ

って、絶えず戦が繰り返されていた。市内に残る山城の大給城^{おぎゅう}、岩倉城、平山城の伊保西古城、広瀬城などの城跡は、戦国時代の様子を今に伝えている。

時代は江戸の世を迎え、慶長9年（1604年）になると、戦国の土豪出身の三宅康貞が1万石の大名としてこの地方に封じられた。彼が衣城（桜城）の初代城主だ。康貞は衣城の築城とともに、西町、中町、竹生など七つの区分けをして城下町の体制を整えた。以後、衣の地は幕府の代官・鳥山牛之助精元、本多忠利、内藤政苗といった藩主に統治されることになり、その中で地名の「衣」は「挙母」に改められ、町割も八町に増えた。

● 自動車産業の誘致 養蚕からクルマへ — 明治時代～昭和（戦前） —

明治から大正にかけて、挙母町は養蚕・製糸業を中心に発展を遂げた。乗合自動車の開業や三河鉄道（現・名鉄三河線）の開通など、大正時代半ばまでに挙母町が大幅な交通網の近代化に成功したのも、「三河地方有数のマユの集散地」だったという点を無視しては語れない。

しかし、昭和に入ると国内・外の生糸の需要は急速に陰りを見せ始めた。「養蚕の町」として栄えてきた挙母町も、その影響から免れられず、かつての勢いを失いに失っていった。

養蚕業の衰退により危機を迎えた挙母町だったが、ちょうどこの時期、刈谷の豊田自動織機製作所が、新しく設置した自動車製造の工場用地をさがしていた。これを知った当時の町長・中村寿一は、町の繁栄を取り戻すため町議会の協力を要請し、いち早く工場の誘致に乗り出した。

町長はじめ大勢の人々の努力の末、工場の誘致が実現した。昭和13年にはトヨタ自動車工業株式会社（現・トヨタ自動車株式会社）の挙母工場が論地ヶ原（現・トヨタ町）の丘陵地に完成した。工場では、普通トラック・バス・乗用車などの生産が開始され、ここに「クルマのまち・豊田」としての第一歩を踏み出した。町にも再び活気が戻り、人口も、昭和10年に1万4千人、15年に2万5千人と急速に増えていった。

● 市制施行そして豊田市へ — 昭和（戦後）～ —

戦前から挙母町を市にしようとする動きはあったが、深刻化する戦時体制や、人口が規定に満たないなどの事情から、なかなか実現には至らなかった。しかし戦後に入ると、碧南市や刈谷市など近隣の町でも次々と市制施行が実現し、「挙母市」に向けての要望はいっそう高まった。こうして昭和25年12月、臨時町議会が「挙母市制施行申請書」を県に提出し、翌年2月の県議会で全会一致の可決を得て待望の「挙母市」が誕生しました。

トヨタ自動車工業株式会社の工場誘致により危機を免れたとはいえ、挙母市には、まだ自動車関連工場が全部で17社しかなかった。挙母市が自動車産業を中心にした工業都市に向けて本格的に乗り出したのは、昭和29年の「工場誘致奨励条例」の公布後のことだった。この条例に従って積極的な工場誘致が行われ、関連工場数

を大小合わせて60数社にまで増やすことができた。

自動車産業が本格的に軌道に乗り始めた昭和33年、商工会議所から市にあてて一つの請願書が出された。それは、挙母市が全国有数の「クルマのまち」に成長したこと、地名の「挙母」が読みにくいなどの理由から市名を変更したいという旨の請願書だった。こうして、名称変更の討議が行われ、翌34年1月、自動車産業とともに発展することを誓って市名が「豊田市」に変更された。さらに、昭和35年には市制施行10周年記念として、アメリカ・デトロイト市と姉妹都市提携を行った。このように、豊田市は国内にとどまらず広く海外に向けても「クルマのまち」として積極的なPR活動を続けて行くことになる。

対外的な知名度が高まっていく一方で、市としての規模も充実してきた。市制発足以来、西加茂郡高橋村をはじめ隣接する町村との合併が積極的に行われ、昭和45年の東加茂郡松平町との合併によって、ついに挙母市発足当時の7.5倍にまで市域は拡大した。この県下2番目の広大な面積に加え、人口も県下3番目になり、平成6年には「地方拠点都市地域」にも指定された。そして、ますます多様化する地域のニーズに的確で効率的に対応しながら、地方分権の先駆けとしての役割を担っていくために、平成10年4月には中核市に移行した。

● 平成の大合併そして持続的発展が可能な社会を目指して

平成17年4月1日、西加茂郡藤岡町・小原村、東加茂郡足助町・下山村・旭町・稲武町との合併を果たし、人口約40万人、面積約918平方キロメートルの新生豊田市として新たなスタートを切った。また、愛・地球博（2005年日本国際博覧会）も開幕し、これに合わせて伊勢湾岸自動車道・東海環状自動車道も整備されるなど、さらなる市勢発展に向けての環境も整ってきた。

平成20年3月、「人が輝き 環境にやさしく 躍進するまち・とよた」を将来都市像に設定した「第7次豊田市総合計画」を策定するとともに、平成21年1月、国から「環境モデル都市」の認定を受け、本市の特徴・強みである「交通」「産業」「森林」の3つの分野を柱に、市民との共働により「環境」と「経済」が両立した持続可能な社会の構築へ向けた取組が始まった。

